

# 聞名仏教

第99号  
(発行日)

2018年12月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.onet.ne.jp

http://nenbutsuji.info/

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日 午後2時始  
(8月は休みます)
- 〈念仏座談会〉  
毎月12日 午後3時始
- 〈聞名の会〉  
毎月6日 午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月18日 午後6時30分始

## 現代の後生の一大事

蓮如上人(一四一五〜一四九九)は「後生の一大事、油断あるまじく候」と仰せられました。後生とは死後の生こととで、死後どこへいくのかという問題です。

仏教では仏になる因(タネ)がなければ、今までさまざまな善悪の行いを重ねてきた行い(業)の結果は死んだら消えなくて続いていき、その業の内容によって次に生まれる領域が決まると説かれています。

曾我量深師(一八七五〜一九七一)の講話の中に「前世に業を作ると、その業は命終わっても尽きません。業が生きている。肉体が死んでも、業は死なないものである。その業がさらに次のからだを作ってゆく。生みだしてゆく。過去にしたところの、善なら善、悪なら悪、善でも悪でも一一その過去の善悪の業が、体の命尽きても業は尽きません。そうして、業を果たすために、新たにからだできてゆく」

「われわれ人間は、過去の業と現在の生活との間に、何も記憶のつながりがない。だから、過去の連続というものはない。はつきりしたものは自分にはないが、私どもにはちゃんと宿業というものがあって、次の生を受けることになれば、前世の生と現在の生との間に連続というものはある」(「曾我量深講話録二」)とあります。

それまでの善悪の行いによって死後にどのような領域が現出するかについて五道とか六道とかが説かれています。その中で悪業が多ければ、三悪道といって地獄道・餓鬼道・畜生道といった苦しみの領域が現れる。また善業が多ければ天道なり人間道なりの楽の多い、あるいは苦楽半ばするような境界に現れる。人間は善なる行為よりも悪の行為が多いので、そのままでは死して三悪道に落ちるしかないから、早く後生を問題にして仏法を聞きなさいと蓮

如上人は教化されています。上人の「御文」一帖目(一の八)には

「そもそも人界の生をうけて、あいがたき仏法にすでにあえる身が、いたずらにむなしく<sup>ならく</sup>擦落(地獄)にしまんは、まことにもってあさましきことにはあらずや」

と仰せられ、早く仏法を聞いてアミダ仏の御助けにあわせて頂きなさいとお勧め下さっています。

蓮如上人は十五世紀の方です。すから、こうした説法は多くの人に影響を与え熱心に仏法を聴く人が現れたのでした。

現代はどうかというと、後生を問題にする人が少ない状態です。

しかし、この「私は一体何処へ行くのか。死してどうなるのか」という問題そのものは、何時の時代にもどの国の

人においても、どこまでも人間にひつついている根源的な問題、苦しみや不安のもとになつている問題であることに変わりはありません。

ではこのような後生(後世)が問題にならない場合は、宗教は私たちには関係が無いのかというところではありません。

真の宗教は、現在只今の生の基本にある問題への答えでもあるのです。

その生の基本にある問題というものは、誰にでもあるのですが大抵はそれに気がつかないでそのままやり過ぎていくといえましよう。

死してどうなるかというのでなくて、今現在の生が、何か居り場がないとか、うつろであるとか、足が大に地についていないとか、そういうような問題は誰でも

## 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日(土) 午後二時始

講師 滋賀県・大谷派玄照寺住職 瓜生 崇師

\*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話(念佛寺住職)があります。

あるのです。

そしてこの問題が心理的にも気分的にも非常にやっかいな問題として日常生活に露わとなることがあります。

学生の頃ご講義を聴かせて頂いた先生に西谷啓治先生（一九〇〇〜一九九〇）という方が居られました。先生はこうした問題にぶつかつた若き日のことを八木誠一先生（一九三二〜）との対談『直接経験』春秋社）のなかで、こう仰っています。

「やっぱり自分としては、しよつちゆうそれが問題になる。ハエがね、ガラスにぶつかつて、でられない。あれにちよつと似ているような感じで、ガラスが一枚、間にあるということ。どこか一番基本的な付け根のところね、どこかこう、透明な境がある。境が目があるっていうのかな。足が地についていないっていうのは、そういうことだと思ふんですけれど、そういう感じですね。論理内の問題というんじゃないにね。これ、どう言うのかな。自分の生きていくということの根本のところでの問題ということ。

結局禅（相国寺の禅道場）に行つて、坐ると言うだけだ

つたですね。それで足が地についていないという感じは、とれちゃいましたね」と。

この話を八木先生はこの本『直接経験』の「あとがき」に

「西谷啓治先生は私との対話の折、学生時代に哲学を学んでいるときは、なにか自分がガラスを隔てて事物に接している、足の裏と地面の間に隙間がある、という感じに苦しめられていたが、禅に参じてそれがとれた、それは直接経験に直接しないということだった、と大変印象的なことを語られた」と述べられています。

西谷先生が学生時代に「なにか自分がガラスを隔てて事物に接している、足の裏と地面の間に隙間がある、という感じに苦しめられた」という、こういう感覚いけば、生活全体が大地に足が付いていない、なにかそこから隔離され閉じ込められているような感覚になつて苦しまれたということだと思います。これはだれでもあり得ます。

そして、やはりこういう問題にぶつかられ、その解決を真剣に求められた方に滝沢克

己先生（一九〇九から一九八四）がいます。先生は「十二歳になつた頃、わたしはある日不意に、自分はそもそも何ものなのか、このわたしはもともとどこから来て、とどのつまりはどこへ行くのか」（『滝沢克己著作年譜』）という問題意識を持たれ、それがずっと続いて

「すべてが、どこか宙に浮いているような感じでした。実在感はおたくしから消えて、二度と還つて来ませんでした。わたくしはまた、わたくしの友だちともそれまでどおり交わりはしました。しかし、生活の根底では、まったく独りきりでした。ちょうど堅くて厚いガラスの壁がかれらすべて、周囲の世界全体とわたしのあいだに立ちはだかつてでもいるようでした。なぜそんなことになつたのか、わたくしにはまるで分かりませんでした。したが、事実それはわたくしに起こつたのでした。わたくしはどうしてもその奇怪な状態から脱け出ることができませんでした」（『滝沢克己著作年譜』）

といわれています。そして滝沢先生は西田幾多郎博士の論文を真剣に読まれました。毎日毎日読んで考え

る生活が続ききました。読んでも読んでも考えても考えても分からなくて寝込むこともあつたようです。それがあつた自分です。自分がおかれている基本的な場所について気がつかれてこの苦しみから脱却されました。

西谷先生も滝沢先生も、特別なことをしたからそういう問題が起こつたというのではなく、自分の人生を考えている中で、自分と世界とが隔てられて閉じこめられているような、非常にうつとうしい感じになつたのだと思ひます。そしてこの問題が解決しなくては真に生きることが出来ないという状況になつたのだと伺います。

実は筆者がこういう先生方の若き日にぶつかつた問題を知つたのはだいぶ後のことでしたが、この先生方の告白を聞いてびっくりしたので、西谷・八木・滝沢の各先生は自覚も知能も知識も筆者にとつてはまさに雲の上の人で、世界的な意義をもっている宗教哲学者たちですが、先生方の経験された苦悩は筆者自身が若いとき持ち続けたのとはほぼ同じ苦しみでした。

ずつと以前、『仏に遇うまで』という小著に若き頃のことを綴つたことがあります。高校時代のことですが、

「こういう内なる問題が私に起こり、先人の書を読み進んでいったのであるが、それと同時に、どういふわけか私の外的世界と内心の世界が乖離しているような感覚になつていった。自分と周囲との間に、ガラスのような目に見えぬ意識の壁があつて、外界の人や物に対して生き生きとした実感がなくなつていった。うつとうしさが増していき、自分と世界との分離意識によつて、なぜか分からぬまま、非常に寂しい感じで日々を送るようになったのである」と、その頃のことを書きました。

こういう問題は自分だけの特殊な問題かと当時思つていましたので、はからずも西谷・滝沢先生も同じような苦しみを経験されたことに驚いたのです。

ですからこういう状況は人間の素質や知能や人徳の質に関係なく、誰にでも起こりうる人生の基本的な問題だと思ひます。しかもどうしても解決を求めなくては生きられない

い、そういう意味では「後生の一大事の問題」だと思おうのです。

それはおそらく人生そのものが問題になってきたところに起こって来た感覚であり気分であったと思いますが、なぜそうなるのか今も分かりません。ただ誰にでも起こりうる生活感覚・人生感覚だと思います。しかも脱却しがたい根本気分となってしまうのです。

筆者は大変愚鈍な者ですから脱却するのかなり年月がかかりましたが、称名念仏とその聞思によつてはからずも出ることができました。

こういう問題はどうしても解決したいということになりますから、これも「後生の一大事」だといっていいと思います。(了)



### 〈遠方法話予定〉

○十二月十五日(夜)から十六日午後迄。姫路市。西源寺。

○二月十九日。名古屋。高畑聞法会館。午前十時より法話・座談

(詳しくは念佛寺にお尋ね下さい)

# 無碍光仏のひかりには

(和讃問答)

無碍光仏のひかりには

清浄歓喜智慧光

その徳不可思議にして

十方諸有を利益せり

(大経和讃)

智慧光仏・不断光仏・難思光

仏・無称光仏・超日月光仏と

号す。

と説かれています

N 「このご和讃では、無碍光

の働きが清浄・歓喜・智慧光

として私たちが利益して下さ

ると説かれていますね」

D 「ええ、聖人は十二光の中

で無碍光をアマダ仏のお徳の

なかでことに有難い光明と受

け取っておられ、この無碍光

は衆生の煩惱・悪業にさわり

なく衆生を摂め取って救うて

下さる大悲のお心である、と

ともに清浄光・歓喜光・智慧

光のお徳があつて衆生に恵み

を与えて下さるといわれるの

でありましょう」

N 「こうした恵みは大無量寿

経ではどのように説かされてい

ますか」

D 「それは、

それ衆生ありて、この光に遇

えば、三垢消滅し、身意柔軟

にして、歓喜踊躍し善心をこ

くに生ず。もし三塗勤苦の処

にありてこの光明を見たとまづ

れば、みな休息することを得て、また苦惱なけん。寿終わりて後、みな解脱を蒙る。

と説かれています」

N 「ここで清浄光の利益とは」

D 「三垢消滅し、と説かれて

いますが、三垢とは貪欲と瞋

恚と愚癡の罪です。清浄光は

私たちの貪欲は罪であると

知らせ下さり、貪欲の罪を浄

化して下さる働きです」

N 「歓喜光とは」

D 「怒りの心は罪であると知

らせて下さり、瞋恚の罪を浄

化して下さる働きです」

N 「智慧光とは」

D 「自己中心的な物の見方(愚

癡)を罪と知らせて下さり、

愚癡を智慧に転換せしめて下

さる働きです。それはまた、

私たちに念仏を信じる信心を

起こして仏になるべき身にし

て下さる働きです」

N 「経文の(身意柔軟にして、

歓喜踊躍し善心をここに生ず。

云々)

はおよそどういう意味ですか」

D 「アマダの光明に遇えば、

私たちは貪欲・瞋恚・愚癡の

塊であると知らせて下さって、

その罪を浄化せしめられてい

き、私たちの身も心も軟らか

くなり、喜びが起り、善に

向かおうとする心が起る。も

し三塗(地獄・餓鬼・畜生)

という苦しみの境界の中にい

る衆生でも、このアマダ仏の

光に遇えば、苦しみの中に光

を見出しそこに居り場をあた

えられ安らぎが恵まれる。こ

のようにして、寿命が尽され

ば浄土に生まれて、仏のお悟

り(解脱)を完成することが

出来る、

という意味だとお聴きしてい

ます」

N 「有難いですね」

D 「南無阿弥陀仏にはそれほ

どの功德があるのですよ、と

釈尊が仰せ下さっているの

です。そのような南無阿弥陀

仏にあい、それほどの功德の南

無阿弥陀仏をいただきながら、

宿業の深い私は少ししかこう

した功德を感じていません。

愚鈍なのです。七高僧や宗

祖、のみならず妙好人たちは

この功德を十分にいただいて

おられるのだと思います」

N 「では(その徳不可思議に

して十方諸有を利益せり)と

は」

D 「無碍光の光はこのように

私たちの思いの及ばないよう

な不思議な有難いお徳であつ

て、迷い苦しんでいる全ての

衆生に働きかけて、上のような

広大な恵みを与えて下さる、

とのお心でありましょう」

N 「諸有とは」

D 「迷いの世界を流転し続けている存在（衆生）」という意味です」

N 「その諸有なる私たちに罪を罪と知らしめ、信心に導き、罪を浄化し安らぎを与え、終には仏にして下さるそういう利益を尽十方の無碍光仏（アミダ仏）は与えて下さるのですね」

D 「ええそうです」（了）

### （法然聖人のお言葉）

四国配流から京都に戻られたの法然聖人の説法の中で次のように仰せられている。

「世路のいとなみは往生の資量とあてがい、妻子眷属を知識同行とたのみて、よわい（齢）の日々にかたぶくをば、往生のようやく近づくぞと喜び、命の夜々に衰うるをば、穢土のようやく遠ざかると心得、命の終わらん時を生死の終わりとあてがひ、形をすてん時を苦悩の終わりと期し」

\*

極楽は 日に日に

近くなりけり

あはれうれしき

老いの暮れかな

（伝・法然聖人の歌）

## 信心夜話

『松並松五郎念仏語録』より松並さんの歌を味わってみます。

\* \* \*

見えぬみ親にあいたい時は

六字称えて声であう

ほんに念えば有難や

アミダ仏は見えない。いのちはかりなく、光はかりなきはたらきであるアミダ仏が見えるはずはありません。見える物は有限なかぎりあるものであります。目の前に見えているイスも机も肉体もあるいは月も、見えている物はみな生まれてほろびゆくものです。

アミダ仏はいのちと云うても物質的な生命に限定されない。光（智慧と慈悲）の徳をもてるあたたかい量りなきいのちです。慈悲深きアミダ仏はご自身を一切衆生の上に表して、その働きを知らせて下さる。『正信偈』には「重誓名声聞十方」（重ねて誓うらくは名声十方に聞こえんと）とありますが、名となり声となつて十方の衆生に働きかけご自身をお知らせ下さる。それが称えるお念

仏の声であります。アミダ仏は私たちにナムアミダブツと称えさせナムアミダブツと聞かせて下さる。ナムアミダブツは私の称える声ですが同時にアミダ仏の喚び声であります。そこを松並さんは

一人称えて一人で聞いた

母と二人の声がする

ほんに念えば有難や

と詠われています。念仏の一声が私の声でありつつアミダ仏の声である。一声の上に母（仏）と二人の声がする。念仏の声においてアミダ仏にあう。声であう。これが真宗の大きな特色です。宗教は無限なるものと有限なる者、神と人、仏と人との出遇いです。これなくしてまことの宗教ではありません。

この宗教の本質が、ナムアミダブツと念仏する一そのところ成就するのです。いかにして人は仏（神）にあうか。これが人間の根本課題です。ところが人からは仏にはあえませんが、有限なものが無限なるものをつかむことはできません。しかし有難いことに、無限なるアミダ仏は私たちに、アミダ仏の方から「あいたい、

あいたい、あつて親子の名のりをしたい、救いたい」と、とうとう南無阿弥陀仏の号号となつてあいにきて下さる。ナムアミダブツの声となつてあいにきて下さっている。どこに。いまここに。宿業の身、危ない身、煩惱の身にあいにきて下さつてナムアミダブツとお出まし下さる。聞かせて下さる。

この身は一時的な、いつ終わつても文句のいえない。しかも煩惱の湧き場所です。この身は今日あつて明日はないようなぼろ屋のようなもの。そんなぼろ屋にアミダ仏は親として、主として住んで下さる。ともに生きて下さる。

不思議に出てくる六字の主は

今のからだに仮り住居

ほんに念えば有難や

いつも我家はあばら屋なれど

内で愉快の鼓打つ

ほんに念えば有難や

我がいのちはしばらくの物です。アミダ仏はこの身に訪れて主（主体）となつて仮住まいして下さる。また逆に、お念仏の教えによつて、この身は煩惱の身、危ない身、無常の壊れゆく身と知らされます。お念仏がなければ自分の身体をいつまでも保ち続けることばかりにとらわれてしまい、仮のものとは知れない。

こんな粗末な身にアミダ仏は有難いことに主となつて下さつてナムアミダブツとご自身を私に知らせて下さる。煩惱の心において南無阿弥陀仏と鼓を打つて下さる。大悲ゆえに。

「ほんに念えば有難や」と「念」という字で、称名念仏と「念ぜられる」を一つに表して下さっている。念仏するままがアミダ仏のお心が感じられ念じられているのです。（了）

## 〈お知らせ〉

毎月二日に行つておりました念仏座談会は今年かぎりといたします。来年からは毎月二日の念仏座談会はございませんのでご注意ください。なお、毎月十二日の座談会は従来通り行います。